K318
408

市民討議の理念と実際

横浜市長
飛鳥田一雄

市民局相談部

館内
館内
KY318
408
横浜市立図書館
0002960699

K318
408
E10799

どうもご苦労さまです。

いま，司会者からお話がありましたように，「市民参加」とか，あるいは，「市政のあり方」という問題について，私は比較的，外へ行ってしゃべることが多いのは事実であります。しかし，市役所の皆さん方に，こうした形でお話しするという機会は，ほとんどありませんでした。ぼくなりの考え方で，あっちへ行ってしゃべり，こっちへ行って書きということをしている以上，皆さん方は，当然どこかで聞いてくだすっているだろうし，あるいはまた，ぼくが，あちらこちらの雑誌などに書いていることなども，読んでくだすっているだろうと思っていたわけです。

ところが，聞いてみると，なかなかそうでもないようであります。雑誌や本などに書いたことについても同様だそうでありまして，やはり一度，皆さん方にお話しする責任があると，こういわれますせめて，ぼくの書いたものや，どこかでしゃべることぐらいは聞いてくだされば，という気持が卒直にいってありますけれども，それはやはり，ぼくの個人感情でしょう。そういう意味で，きょう，市民討議の問題について，皆さん方に，ぼくの考え方をお話ししてみたいと思うわけです。

政治から疎外された市民

いま，市政を執行していく上についてというよりは，この横浜の将来を今後きめていくという問題について，あるいは，日本の政治それ自体について，どんな状況にあるのだろうかというところから考えていただかなければ，私はいけないと思います。私たちが，ただこの市役所の中で，印鑑証明や戸籍謄本を，どううまく出していくかということだけで自己満足をしていくのならば，それはもう，お互いによしたほうがいいと，こう思っているくらいであります。すこし語弊がありますが，ぼくは元来，極言居士でありますから，かなり極言的なもののいい方をします。

横浜市政をどうするかということは，日本の政治全体につながることであり，日本国民全体の問題だ，こう，ぼくは考えているわけです。そして，そう考えることに，決してうぬぼれだとか間違いがあるとは思いません。たとえば，人口的にいっても，1億日本国民のうち，250万が横浜市民だとすれば，日本人全体の中の，40人に1人は横浜人なのです。40人に1人の仕事というものは，必ず日本全体にからむはずです。そういう意味で，横浜市政の問題を，横浜市政という小ちゃなカニの甲らの中だけで考えていくという考え方は，ぜひ皆さん方にもやめてもらえないだろうか。40人に1人は横浜人なのです。だとすれば，それにむけて行なう市政というものは，よかれ悪しかれ，大きく日本全体に響いていくという自負と，そういう現実認識をはっきり持つべきだろうと思っています。

そこで，そういう状況の上に立って，それじゃあ，ぼくらはどんな状況にあるのかといえば，おそらく，日本ほど，民主主義の公的な制度がととのっている国は，世界でもすくないだろうと，ぼくは

横浜市図書館

思っています。20才以上を過ぎれば，老いも若きも，婦人も男も，すべての人間に選挙権が与えられているわけです。ヨーロッパの文明国あたりですら，まだまだ，日本ほど選挙権が平等に与えられていない国が，たくさんあります。このように，非常に広範に選挙権が与えられ，しかも，選挙それ自身は，かなりドライに行なわれている。それは，もちろん，買収も供応もあるでしょう。しかし，これはどこの国にもあることでして，日本なんかはまだまだいいほうだと，私は思っています。そして議会ができ，議会は非常に大きな権限を持ち，しかも，議員や特別職に対してリコール制度があり，あるいは，監査請求の制度があり，そういういろいろな制度が全部ととのっているというのは，おそらく，日本をもって最高とするだろうと，ぼくは思います。

ところが，これほど民主的な制度がととのっているにもかかわらず，それでは1億国民は，どんな心理的な状況にあるかといえば，政治や行政からの疎外感というものを，胸いっぱいに持っているというのが，いまの現実でしょう。おそらく，疎外感を持っていない市民，国民というものはない。

現に，ぼくが国会にいるときだって，「どうせ，鈴木茂三郎さんが総理大臣になっても，吉田茂さんがなっても，先生，同じじゃないですか」というのであります。これは，野党である社会党が無力であるということを意味しているだけではなしに，しょせん自分たちは疎外されたものであり，政治に参加していないという自意識にもとづいているはずでありまして，こうして政治から，疎外感によって逃避している。

いま，新聞で世論調査をしてみますと，約3割が保守党，3割が革新のトータル，残った4割は政治的無関心。こうして政治的無関心というものは，次々にふえていっています。この問題について，もっと真剣に，保守であれ，革新であれ，考えない政党というものは亡びていくだろうと思っていますし現に，その懲罰を食いつつあるわけであります。

こうして，これだけ民主主義の公的な制度がととのっているにもかかわらず，4割は政治的無関心。無関心というのならまだしも，政治に対する反発を持っている。政治に対してアナーキーであるといってもいいんじゃないだろうか。「しょせん，政治家なんていう動物は……」などというもののいい方を，われわれはされているわけです。はなはだ心外ですけれども，しかし，これが現実でしょうなぜ，こういう状態が出てくるのか。

結局，そこには，支配される市民，被治者としての市民しかいないということです。能動的に，市民の側から政治に参画をしてくるという，あるいは，政治に対して，自分がつくっていくという充実感がないのです。行動によらない，ただ，治められるだけというのであるならば，4年に一ぺん何のたれがしと書いて投票するという，それだけの参加でしかないとすれば，それはやはり疎外感を生じそこから，政治へのニヒリズムになる以外の道はないはずです。そこにまた，逆にいえばファシズムの芽が出てくる。こういっていいんじゃないだろうか。そして，こういう分析について，だれ一人，反対のできる人はないだろうと，ぼくは思っています。

国会図書館

選挙・議会・直接民主主義

さっき申し上げました選挙という制度を一つ考えてみてもたいへんなことです。だれでもが，自分の欲望をくっつけて投票します。たとえ，4年に一ぺん，何のたれがしと書く，そのことですら，自分の希望をこめて，きっと書くだろうと思います。保育所をもっとほしいとか，もっと職場がよくならないかとか，教育の現場をもうすこしやりよくしてもらいたいとか，あるいは，老人の無料パスがほしいとか，農民にしてみれば，農産物の価格が上がったり下がったり，不安定で，とてもやっていけないとか，そういう思いをこめて入れるわけです。したがって，この一票は，いわば汗と血にまみれているわけです。

ところが，それがポトッと，投票箱の底に落っこった瞬間に変質してしまいます。締切時間が来てそれで，ガラガラッとあけてみると，もはやそれは人間くさい一票ではない，なま身の一票ではなくして，単なる最大公約数としての数字に変わっているわけです。Aの候補者は何票，Bの候補者は何票と，一つのなま身でない，人間のにおいを失った抽象的な一票に変わっている。

こうして民主主義というものが，ここで変質するわけです。いろいろなにおいや，いろいろな汗，喜びやかなしみをこめた一票が，たちまち，抽象的な投票者一般になり，最大公約数に切りかえられる。こうして，この段階ですでに，議会と市民，国民とは，ガッと切り離される。疎外感しか出てこない。一方の議会では，非常に民主的な制度で選ばれた議会ということをタテマエにしながら，じつは日本の独占資本が大衆を支配していくための，民主主義と名のついた大衆支配の道具に，議会は変わってしまうわけです。変わるだけの要素を持ってるわけです。この乖離，この背反は，こういうものが，ねじ曲げる力に変わるわけです。こうして，その結果に基づいて，かえって，市民の政治からの逃避，国民の政治に対する敵意が生じてくるといわざるを得ないでしょう。

こういう状況をそのままにほうっておいて，そのなかで権力者になろう，政権をとろうというひしめき合いが，率直にいえば，いまの政治です。これは，共産党だって，社会党だって，民社党だって公明党だって，自民党だって，ぼくは，あてはまるだろうと思います。われわれは，そういう体質を変えない限り，ほんとうの革新もないだろうし，ほんとうの保守もない。ぼくは，保守ですらそうだと思います。

そういう意味で，われわれの頭に浮かんでくる一つの考え方があります。

19世紀にトックヴィルという学者がいました。村のはずれに，大きな大きなカシの木が立っていた。初め，村の人々は，カシの木の下に全員集まって，今度は農道をつくろう，今度は学校を建てよう，今度は教会を建てようと，村を改良してきた。しかし，生活条件がよくなると，外から人が入ってきたり，生まれる子供もふえたり，こうして，500人しかいなかった村の人口は，たちまち3,000人になる。5,000人になる。5,000人になれば，もう，どんなに大きなカシの木だって，その下には集まれない。そこで，10人に1人ずつの代表者を選んで，相談をしょうじゃないかという形になる。

こうして，議会ができてきた。いわゆる関接民主主義というものがあらわれてきたこういうのであります。

しかし，世界のどんな歴史を調べてみたって，そういう典型的な議会制発展の歴史はありません。ですから，おととぎ話といっていいんでしょうけれども，一つの示唆は持っていると思います。

こうして，私たちと議会制民主主義，間接民主主義というものが，一つのリミットに達し，これの形骸化，空洞化というものが，大衆にとってマイナス点になりつつある現代において，私たちは，もう一ぺん原点に戻ってみる，すなわち，村のカシの木の下に集まりあってみる必要があるんじゃないだろうか。直接民主主義に戻る必要があろうと，ぼくは思います。困ったときには，原則に帰れ。

しかし，われわれは，単純に原則に帰るのではありません。1億人から人間がいるのですから，間接民主主義，議会制民主主義というものを否定すること自体はナンセンスでしょう。1億人が，一本のカシの木の下に集まれば，ガヤガヤワイワイ，騒乱が起きるだけです。そこで，議会制民主主義というものを本質として，本筋として持ちつつも，その議会制民主主義をささえていくための直接民主主義というものがあっていいと，ぼくは思うんです。

そういう意味で，手っとり早いところというと，ちょっと叱られるかもしれませんが，それぞれの地方自治体の中において，間接民主主義ではない，直接民主主義的な制度を採用していくことによって，人々は，議会制民主主義が，山のあなたの空遠くそびえ立っているお城から，私たちのお城に引き戻す力を持ってくるんじゃないか。すなわち，議会制民主主義を，わが手に取り戻せるんじゃないだろうか，という感じがするわけであります。そのためには，直接民主主義を大幅に取り上げていかなければなるまい。たえず，民衆と共に息をし，民衆の中から，そのエネルギーを引き出していかない政治，あるいは行政というものは，かならず形骸化し，固定化し，やがては民衆の疎外物になることは，だれでもが知っているところであります。

こうして，私たちは，新しい民衆のたたかう手段としての直接民主主義を手にするのです。いま，何に対してたたかうのかといえば，独占資本だろうと思います。われわれを支配している独占資本に対してたたかう手段としての直接民主主義。こうして，私たちは，現代にぶつかっていくわけです。

現実の困難・誤解をこえて

あるいは，横浜のようなところは，そういう直接民主主義を持ち出すには最も不適当なところかもしれません。人口がたえずふえていく。人口が流動していく。そして都市的な施設が非常に貧困で欠乏している都市。そういうところでは，一方において，地方の県庁所在地のように，昔からの人々が住んでいるというところに比して，直接民主主義とはいうものの，話が非常にしにくい。すなわち，直接民主主義の基本には，いまは滅びつつありますけれども，コミュニティーというもの，共同社会，地域社会というものがない限り，やはりなかなかむずかしい。それは，ともすれば，エゴイズムか無責任主義に結びついていくというむずかしさがあります。とくに，横浜のように，250万のうち

横浜在来の人間は50万，2割しかいないというようなところでは，非常にむずかしいかもしれない。

しかし，私たちは，だからといって，たじろぐわけにはいかないのです。何といっても，これにいどまない限り，横浜の市政というものも本物にならないだろうし，しかも，日本の政治それ自身も，本物になっていかないだろう。こう，私は思うんです。

と同時に，ドイツのシュミットという学者もいっていますように，民主主義というものは，一つの政治行政の組織の問題であります。そして，イデオロギーとは，次元，ディメンションを異にするものということだけは，明らかでしょう。したがって，自民党といえども，社会党といえども，何党といえども，民主主義者であると称する限り，この道を通ることは，決してむずかしいことではないし彼らのためにも，非常に重要であります。

私たちは，市役所という，比較的中立的な立場を取るべきそういう団体の中において，イデオロギーそれ自身を，社会主義をとか，資本主義をとか，農本主義をとか，ファッシズムをとかいうようなイデオロギー，そのものを取り上げることは，将来はいざ知らず，いまの段階では，ぼくは不適当だろうと思います。

とすれば，イデオロギーとは全然，次元を異にする民主主義の組織，民主主義のあり方ということにからむ改革を行なうことが適当だろう。そしてまた，それこそが，すべてのイデオロギーが正しく花咲く土壌をつくるということになるはずであります。そういう点，市議会だとか，町の中で，イデオロギーと直接民主主義というもの，すなわち民主主義のあり方という問題をゴチャまぜにして，あたかもこれをイデオロギーであるかのごとくいう人があります。ぼくは，率直にいえば，社会主義者です。ぼくのイデオロギーは社会主義です。だがしかし，それとこの民主主義の問題とは，次元が違うのであります。そういう社会科学的な無知が，これをこんがらからせ，あるいは，故意にこんがらからせて，問題を持ち出そうとしている人々もありますけれども，私たちはそうはいかない。この横浜市というところで，直接民主主義をとることは，まじめな民主主義者であるならば，どうしても必要な基礎をつくり基盤をつくっているんです。と同時に，現代に対する最大の治療になるわけです。そういう意味で，私は，直接民主主義というものが必要だと思う。

これは，私だけではありません。世界の，イタリアでも，フランスでも，イギリスでも，アメリカでも，ロシアですら，あるいは中国ですら，直接民主主義的な手法というものを，みんな採用しているのであります。このことについて日本の政治家自身が，無知な，あるいは無関心な態度をとるとすれば，私はそれがすくなくとも政治家として真摯であるかどうかを疑わざるを得ません。あるいは，都市経営者にしても，このことに無関心でいる人々に対しては，やりきれないものを感じます。

そういう意味で，私は，横浜だけが孤立して事を行なっているのではない。世界各国で，みんな，このことについて模索しつつあるのだ。イタリアにおける地区評議会制度，あるいは，フランスのグルノーブルで行なわれて，やや失敗の形をなしている市民連合制度，ガムの制度，あるいはモスクワにおける直接民主主義の適用の問題，アメリカにおける参加する民主主義の試み，いろいろあると思います。しかし，私は，この中で「参加する民主主義」ということばに対して，かなりの魅力をかん

じています。

参加する・行動する民主主義

なぜかといえば，民主主義というのは，ただ，ガヤガヤワイワイ議論するだけではなしに，行動するということが前提でありますし，市民の側が，いま，行政なり政治に参加して積極的な行動を起こさない限り，市民の胸の中に巣食っている無力感，あるいは疎外感というものを，ぬぐい去ることはできません。説得だとか，説明だとか，こちら側だけの〝親切な態度〟というもので，そういう疎外感をぬぐい去ることはできない。市民の胸の中で，疎外されているという実感は，市民自身の行動でしか解消しないんじゃないだろうか。そういうことを考えてくると，「参加」ということばには，現代的な意味が非常に強い。こういうふうに，私は思うのであります。

元来，民主主義は行動の原理です。したがって，行動のない，大学の講義のような民主主義などというものは，ナンセンスでしょう。そういう意味で，「参加する民主主義」というのは，ことばとしてはトートロギーです。同じ意味を重ねているという意味で，トートロギーだと思いますけれども，しかし，そのことをあえていうところに，現代的な意味があると，じつは考えています。そんな意味で，どうしても，この横浜の市政というものをつくり出していくためには，「参加する民主主義」というものが必要です。

ところが，「参加する」といってみたところで250万の都市でガヤガヤワイワイ参加してみたところで，どうにもならないでしょう。いま，現に市民運動というものを皆さん方は経験しています。いまの市民運動というのは，本来的にあるべき姿の市民運動であるかどうか。この点についてはかなり疑問があると，きっと皆さん方は，おなかの中で考えているでしょう。それは当然です。現象的に見ても，市民運動というのは，いまの段階においては地域別，問題別です。地域別，問題別である以上そこに地域のエゴイズムが出てくる。個人のエゴイズムが出てくる。あるいは，問題別であるところから，他の諸問題との関連性を切断して，そこだけを見ていく。〝よしのずいから天井をのぞく〟ような狭さが出てくるのは当然でして，これは，いまの市民運動の形態が，当然に生み出す欠点であります。

したがって，その市民運動を，ただただ推し進めていったところで，なかなか問題は解決しないだろう。大阪市立大学の宮本教授は，「そういうものを通じて，市民は，次第次第に自己反省をすることで，視野を広くしていくことだろう。やがて市民運動と市民運動とが結びつき，連合することによって，市民の意識は高まっていくだろう」とおっしゃるのであります。

それはそのとおりかもしれない。しかし，もし，そういう自然成熟の時期を待っているだけとすれば，おそらく，百年待たなければ，自然成熟というものは，あり得ないだろうと思います。そのことが政治として，行政として正しいか。私はそうはいえないと思います。もっと，その成熟度を早めていくという必要があるでしょう。

とすれば，そういう地域別，問題別という弱さなり欠点を積極的に取り除いていく制度を，われわれがつくり出していってもいいだろうと，私は思うのであります。と同時に，他方では，問題別，地域別の市民運動がありつつも，もっと市全体を抱括していくような制度があり，この二つが，互いに微妙にからみ合っていくというところに，問題解決のスピードアップがあり得るかもしれない。そういうふうに，ぼくは思っているわけであります。

と同時に，もう一つの問題点があります。市民参加は，陳情，請願のような形でたえず表現されます。これは，日本人の長い歴史的な伝統で，百姓一揆が始まろうとする。名主が，竹の棒の先に「御上」と書いた紙を持って，殿さまのかごのそばに飛び込んでいく。いわゆる「直訴」。こういう伝統が，たくさん日本人の胸の中にはあるんです。ともすれば，陳情，請願というものは，結果としては「直訴」あるいは「訴え」という形になるのであります。陳情，請願を，民主主義の制度として設けている本来の意味は，「参加」ということにあるはずであります。ところが，日本的風土の中では，いつのまにか，殿さまに直訴する心がまえに戻ってしまうというところに問題点があるんじゃないだろうか。

美濃部さんが，「対話」とおっしゃった。これは，変な話ですけれども，美濃部さんが最初に立候補なさるときに，ぼくが美濃部さんを引っぱり出したわけです。そのときの話ですけれども，美濃部さんは，「飛鳥田君の直接民主主義は賛成だけれども，ことばが堅い。何かもうすこし，大衆に訴えることばにできないだろうか」というので，さんざん，二度も三度も相談しまして，結果としては，あまり変わりばえはしなかったんですけれども，「対話」ということばを考え出しました。これがばかにはやって，〝対話の美濃部か，美濃部の対話か〟なんて話になってしまったわけですが，しかし元来ぼくらが考えた対話ということばは，双方の，イーチ・アザー・コミュニケーションという面が根本にあったわけです。しかし，結果としては，その根本の面が抜けてしまって，しょせんムードに終わったわけであります。

考えてみれば，千百万人の東京，250万人の横浜では，対話的ムードはありえても，現実の対話があるはずはありません。あったらふしぎです。と同時に，大事なことは，都知事なり市長というものを中心にして，問題解決をしていくというのならば，しょせんそれは，封建時代の名君に対して直訴するのと同じことであります。水戸黄門が，助さん格さんをつれて歩いて，あそこのドブがこわれているから直しちゃえ，ここの道路を舗装しろというふうにいって歩く。ときに，お家にあだなす悪人ばらが出てくれば，助さんと格さんが，チャンバラをやって，やっつけちゃう。それでも負けそうになると，「われは水戸光国公なるぞ」「へへェー」というので解決してしまう。こういう名君民主主義では，問題は前進しないわけです。

結局そういう点で，市民と市民とが参加するというのは，市民と市民とが，お互いに交流しあいながら，イーチ・アザー・コミュニケーションを持って，そして，そのコミュニケーションの中から，市政のエネルギーが出てくるという，そういう参加でなければならないのです。ある特定の名士が，横浜市役所へやってきて，「助役さん，こういうことをやったらどうだ」「それは，なかなかおもし

ろいから，やってみましょう」と，こういうのは，単なるアドバイスにしかすぎません。しかも 250万の1人1人が，アドバイスできる余地はありません。しかも，その250万は市政というものについて，ほんとうに知らないわけです。

ですから，私たちは，そういう意味で非常にむずかしい。名君民主主義ではいけない。しかし，同時に，私たちは，エネルギーをどういうふうに出していくかというむずかしさに，ぶつかります。しかも，あとからあとから，人口がふえていくという外的な要因とも，からんでいくわけです。そういう点で，私たちは，市民をどういうふうに参加させるかということについて，いろいろと模索をしているわけです。

現に，皆さん方もご存じのように，ぼくが「1万人市民集会」という主張をいたしまして以来，幾つかの模索があったはずです。住民集会もやりました。あるいは，問題別の，いろいろな集会もやりました。あれもこれも，いろいろやってきて，すこしずつ，質を高めてきていることは，皆さん方もご存じのとおりだろうと思います。

こうして，私たちは市民を市政に参加させつつ，しかも，私たちのエネルギーをつくっていくということでなければ，実際に，この日本の政治の矛盾を打破することは不可能だろうし，横浜市政というものも，変えていくことは不可能だろうと思います。たしかに，マンネリズムの中で仕事をしていくのはたやすい。「昔からの法規や慣例がこうなっていますから，こういうふうにいたします」というのは，非常にたやすいわけです。しかし，そのたやすさが，実は，逆に市民，国民の疎外感だけをつくり，やがてそれが，激情的な暴動なり革命なりというところに導かれていくとすればたいへんであります。私たちは，そういうライデンシャフトが，情熱が，いつも正しい結果を生むかといえば，必ずしもそうではない。そういう激情，情熱というものが，正しいチャネルでリードされ，正しいルートで流されたときに，初めて，それは巨大な力を発揮するのだと思います。したがって，私たちはすくなくともいまから，正しいルートをつくり上げておく必要があるだろう。こうして，20世紀というものは，民主主義の危機の時代である世紀というのは世界の危機であるということでありまして，そういう危機の中の一つに，平和の問題もあると考えております。そういう問題を，私たちは解決したいと，こう思っているんです。

市民討議の必要性と困難さ

理念的なお話ばかりして恐縮でありましたが，そこで，そういうものとして，市民討議集会というものをどうしても必要とする。これは，地域別，問題別の単発市民運動とは違います。一つの区ごとに，積極的に市民の意見を出してもらうということであります。そして，出したそのことが，市政に参加することであり，同時にまた，その人たちが，いろいろな自己満足，充実感というものを，政治に対して持てるようになる。もちろん他の面で，モニターとか，オピニオンとか，行政委員とか，いろいろな形で，市民に参加してもらうことは事実であります。

よく，人は，二者択一に，あちらか，しからずんばこちら，というふうないい方をいたしますが，民主主義の制度というものは，多層多重であっていいのだろう。多層多重であるからこそ，いろいろと各層の意見を拾い上げ，すい上げていくことができるのであります。ただ一つ，この道一筋だけであるならば，かならず，その道につながらない人々の意見は漏れてしまいます。学者の意見も，その専門の問題について，審議会という形で吸い上げていく。このことも重要であります。また，その辺にいる主婦，奥さんたちの意見，この人たちは，特別研究しているわけじゃありません。直感的にものを考えています。その直感も，ときにジャーナリズムによって誤まらされている場合すらある。しかし，こういう人たちの意見も，すなおにくみ入れられるように，モニターの制度も必要でしょう。それから，モニターのような形にできない人たちにとっては，地区集会を開いてあげて，引き上げることも必要でしょう。あるいは，そういう会合にすら出席できない人々にとっては，「市長への手紙」という形も必要でしょう。しかし，そういうものを，多重多層に持って，市民各層のエネルギーを吸い上げつつも，なおかつきちっとした総括部門がなければならんのでありまして，そういう意味で，市民討議，あるいは市民会議というような形を，私は当然必要とする。こういうふうに考えています。

しかし，そういう市民討議をやっていくなかにも，困難さは，たくさんあります。くどいようですが，まず第一には，地域およびその区民会議が，カバーすべき人口の量についてであります。本来であるならば，一つのコミュニティーを前提にする。あるいは幾つかのコミュニティーを踏まえた形で区民討議というものはあるべきものであります。ところが，いまは旭区だって20万，中区でさえ13・4万。みんな20万前後の区になっておりまして，地方でいえば，みんな県庁所在地ぐらいに当たるわけです。したがって，市民討議をするにしては，すこし広過ぎる。カバーする人口は多過ぎるというふうにいえると思います。

この欠点を，いま，われわれが除去するために，旭区を二つに割ってやってみるとか，磯子区を二つに割ってやってみるとかいうことは，なかなかむずかしい。いまの，われわれの持っている現有勢力からいえば，困難であります。とすれば，やむを得ず，それを区単位でやってみる。だが，しかしいま申し上げたような欠点は，もし，へたに運用すれば，これは東京都の区議会に類似するものになってしまいます。東京の区議会それ自身が，大衆から離れていることは，皆さん方，ご存じのとおりでありまして，大衆に密着し，大衆に参加してもらうというねらいが，結果として，東京都の区議会のような形になったとすれば，それは全く意思に反する二重三重の間接民主主義の，もう一つ屋根をつくったにとどまってしまうのであります。したがって，ここには非常な危険性があります。その危険性を，私たちは十分に認識しつつ，それを除去する努力をしない限りだめだろう。無意識に，この欠点をかかえておってはいけない。欠点を，ちゃんと理解しながら克服の努力をしつつ，しかし，現状として，旭区民会議のような形になるということだと思います。

それから，人口増加によって，次々に公的な施設が足りなくなるということは，ともすれば，ただ不平不満を噴出させるにとどまってしまうかもしれない。そういう危険を持っています。と同時に，

横浜市としても，この問題について，すぐ対応できない弱味を持っています。

このあいだも，ある瀬谷区民の人にいったのでありますが，「あなたは，東京の一番まん中の，一番設備のととのってるところから，この瀬谷へ越してきて，東京のようでないとおっしゃる。しかし東京だって，練馬などに行ってごらんなさい。水道もないところがありますよ」と，ぼくはいったのであります。都市というのは，百年かかります。すくなくとも，徳川300年，明治以来，今日まで，百何年，四百年近くかかってできあがった。ですから，日本橋，室町あたりの状況と，いま開発された瀬谷区と比べられたんでは，どうにもなりません。しかし，市民は，そういうせっかちさを，現に持っているんです。そして，そのせっかちさは，ただそれが悪くてせっかちなんではなくて，明治以来，今日まで，ともかく，支配されるだけできた臣民的な感情，そういうものから解き放された市民が，いますぐ，せっかちに変わるのは，お互いにわかるはずです。こういう人々も，われわれはかかえている。だから，そういう人にもわかってもらうという必要があるのです。ただほうっておきますと，「東京都のようでない」「東京都だって，練馬を見てごらんなさい」と，ぼくがことばを返す。市民の，そういう形での性急さを，どう理解させていくのかということも，むずかしい問題です。現実に，横浜市役所が，２・３年で，そこの町をパーッときれいにしてしまう，完備させてしまうだけの力を持っていない。それは，いまの制度の問題であります。財源の問題，政治の問題，中央集権の問題でありますが，しかし，市民には見えない。だから，それを具体的にわかってもらう努力が必要なんです。そういう意味で，制度を変えつつ，わかってもらう必要があるのです。

しかし，そういう困難さを持っているところから，市民討議の場が，単なる苦情，陳情のはけ場に変わってしまう危険があります。こういうものも，十分に私たちは腹の中に入れて，これに取り組まない限り，ほんとうに市民相互の話し合いの中から，エネルギーが出てくるという面は消えてしまいます。

タテ割り行政の欠陥にいどむ

こういう外的な困難さを持っている。と同時に，内的な困難さを，私たちはかかえているはずであります。たとえば，私たちは，こういう問題にぶっつかろうという場合に，昔ながらの習慣を持っています。議会にかけて決定してしまえば，もうあとは，いんぎん無礼であっても，結局は，まかり通してきた，そういう一つの習慣を持っています。こういう習慣を，私たちは打破しなければいけないはずであります。と同時に，いま，横浜市役所の行政組織というものは，タテ割りで，ほんとうの共同作業という面がありません。現実に，そういうものをつくりつつあり，皆さん方の努力というものは，たいしたものだと，ぼくは思っていますけれども，本質的には，まだ，そのタテ割りの欠点から脱却していないと思います。

こうして，自分の局の中だけにたてこもり，自分の局の仕事をやっていれば，それでいいんだという観念から，まだまだ抜け切っていないのでして，「ああ，市民討議，それは市民局の仕事じゃない

か」という形で，自分の仕事として，そのことを考えていただけない弱さがあります。しかし，これは，ぼくはたいへんな間違いだろうと思います。下水道をひいていく，道路をつくる，市営住宅を建てるという問題でも，用地確保が必要です。学校を建てるという問題についてもそうでしょう。ところが，用地をひとつ買いに行っても，「なんだ，市役所か」なんていう形で，じつは，思うように進まない。こうしてタテ割りセクトの結果が，結果としては，自分で自分の首を締めている場合もかなり多いように思います。

あるいは公園をつくるにしても，公園にふさわしくない場合だってしばしばあるでしょう。たとえば，ベルサイユなんかへ行きますと，ブルボン王朝風のシンメトリカルなすばらしい花園などが広々としているのがあります。そういうものが，じつは，いままでは横浜の公園の大部分でしょう。ここ数年は違ってきましたけれども，しかし，都市が求めているものは，かならずしも，まん中に噴水があって，両わきにベンチがあって，その外側に花壇があってというような，ブルボン王朝風の公園だけが都市の要求しているものであるかどうか。むしろ，自然公園，田んぼはそのままであってもいいじゃないか。木はそのままでいいじゃないか。セミがいてカエルがいて，あるいはオタマジャクシが池にいてという公園があってもいいじゃないか。そしてそういう公園と公園のあいだには，若い者が腕を組んで歩けるような愛の小道があってもいいじゃないか。そういう自然公園への要求というものも，この都市の中にないはずはないのであります。ですからそうした意味で，私たちは公園を一つつくるにしても，都市全体の，そしてその都市の他の局の人々との相互交流の中でしか，みんなによろこばれる公園はつくれないんじゃないだろうかという感じがするのであります。

そういう意味で，たとえば吉田川を埋めます。吉田川を埋めて地下鉄を通すということだけではなしに，同時にそれが公園になるという，公園と地下鉄との組み合わされ方。そして一方で大衆性という問題を解決しつつ，一方において都市の空間をつくっていく。オープンスペースをつくっていく。そのオープンスペースが，じつは単なるオープンスペースではなしに，伊勢佐木町という横浜における中心的消費街の発展のために，どういうプラスを持たらすのだろうかという商業経済政策ともからんでいく。こういう形で，それが完成していくということである以上，経済局も緑政局も地下鉄も道路も下水も，みんなここで一つの仕事をしている。たまたまその公園の部分が，公園部という所管に属しているだけでありまして，所管というのは専属ではないはずです。

そういういろいろな問題がある。しかしその問題を，私たちが市民討議にぶつかっていくときにも十分考えておくことが大事であります。市民にとっては，経済局も何局もかに局もないのであります。たんに「市役所」であります。だとすれば，市役所のＡ局ではこういい，Ｂ局ではこういい，Ｃ局ではこういう。そのいい分がみんな少しずつ食い違っていれば，「だからお役所はだめなんだ」という形でしか，市民の頭には映りません。そして私はそれが市民の立場からいえば無理がないと思います。そういう意味で，市民討議にわれわれがぶつかります以上，各局がお互いにたえず連絡を保って，相互の意思統一をはかり，そして都市という一つの製品，一つの都市という芸術品をみんなで共同加工して完成しているんだという態度がない以上，市民討議というものはうまくいくはずがないの

であります。「いや，その部分については何局の所管ですから私は存じません」というのでは，解決できないんじゃないでしょうか。

そういう意味で市民の目から見て，各局というのは，都市という一つの芸術品を完成する共同加工者，共同製作者にしか過ぎない。だとすれば，局と局のあいだのインティメットな連絡，相互理解，そして，ときには相互の激論があっていいんです。そういう激論を調節するために助役さんがいるんですから。助役さんがすべて考えて，何でもかんでも指図していくなら。局長さんも要らないし，部長さんも率直にいって要りはしないんです。むしろ市役所の内部の相互討論というものを採決し，調停していくという役割りが助役さんのほんとうの仕事だとぼくは思っているんですが，実際はそうじゃなさそうです。半分はもっと実務的な指図をしているとしか思えません。そういう意味ではお気の毒だとじつは思っているんですが，ともかくそういう体制がない限り，市民は理解できない。

そこで，市民討議なり区民会議をうまく行なうということは，ひるがえって横浜市役所の行政機構それ自身が，完全に自己体質改善というものをなし遂げなきゃならんということです。この自己体質の改善を自分たちでできない市役所であるならば，区民会議，区民討議，そういうものを執行していく能力がない。こういわざるを得ないんです。

したがって，区民討議，区民集会，あるいは区民会議というものは，市民局が直接の事務は担当していますけれども，全局がこれに責任を負っているんだと考えていただかない限りだめでしょう。そして，私たちは「中央集権反対」なんて口でいってみたところで，それは何にもなりはしません。われわれがかつて官僚主義的な中央集権の行政組織というものを自己改革していく方向を，現実に着々と行なっていかないで，たんに「中央集権反対」ということを唱えても，〝からスローガン〟になってしまいます。ただ，いうだけいっている。自分がそれを改めようとする努力がともなわなければほとんど意味はないと，ぼくは思うんです。

ついでにすこし……。ぼくはこのあいだ，京都の局長さんの研修会に行って，一吹き吹いてきました。皆さん方に逆の反応があって，ご迷惑をかけたかもしれませんが，ぼくは京都の局長さんにこういったんです。

「船橋市長のもとで君らも中央集権反対を唱えているだろう。しかしほんとうにやっていますか。たとえば中央官庁へ行って交渉をする。そうすると中央官庁の技術屋さんのほうが京都市役所の技術屋さんよりかはるかにすぐれているとすれば，〝中央集権反対〟なんて寝ごとですよ。中央官庁の事務屋さんのほうが京都市役所の事務屋さんよりもはるかにすぐれているとすれば，結局〝反対，反対〟といいながら，実力の差で上下関係ができちゃうじゃありませんか。ですから，それはただいっているだけに終わります。技術の点でも事務の点でも，中央官庁の人々をはるかにわれわれは凌駕するものを持たなければなりません。持てるんです。なぜかといえば，中央官庁の人は，大学を出て入ってきて，全国的な観察をしているだけで現場にぶつかっていないのですから，現実に事業の現場を持って下水処理場をつくっている人，道路をつくっている人，高速道路をつくっている人，この現実の経験の上に立った，しかも勉強している人のほうが，はるかに中央官庁の人よりか上にいくはずです」

ぼくはそういったんです。

「いける。いけなきゃなりません。変ないい方ですけれども，このごろの横浜市役所はそういう気概でやっています。完全に圧倒しているかどうか知らないけれども，すくなくとも対等にはやってるはずです。ですからぼくが市庁に来たころには〝局長さん，どこへ行ったんですか〟。〝本省へ行ってきました〟。〝どこに本省はあるんですか，横浜市はブランチですか〟と聞いたものであります。しかし，ぼくはそのときにつくづく思いました。中央と地方との実力の差がある以上。やっぱり「本省」ということばは消せないだろう。そのあと，どれだけの効果があったかどうかは私は知りませんしかし私は一生懸命，事務屋さんでも技術屋さんでもグイグイ伸びてもらうための努力を惜しまなかったつもりであります。こうしていま，われわれの事務屋さん，技術屋さんの中で〝本省〟なんていう人はいなくなっています。ぼくはかなり注意して聞いていますが，いないですね。結局，自然に対等になったんじゃないか。そういうものでなしに，中央集権打破なんていうことを，口先きだけ唱えるのは大きらいですよ。」

このように，じつは京都の一等級の方々にお話をして帰ってきました，あとで「飛鳥田さん，なまいきなことをいってる」という話だったかもしれません。しかし，そういう自己体質を変えていかないで，われわれの新しい行政，政治というものを導き出すことは不可能でしょう。

そういう意味で，はなはだ恐縮でありますが，各局の皆さん方が都市という一つの芸術品をつくっていく，作品をつくっていくことについて，共同責任を持っている。セクトを捨てて，組織はなるほどタテ割りの行政組織かもしれないけれども，その中にいる皆さん方の努力いかんによっては，そういうタテ割り行政を乗り越えて，共同作品というところにいけるだろうと思います。そういうかまえの中でこそ，初めて市民討議の市民にちゃんとこたえられるという感じが私はします。

情報の公開ということ

ですから，この市民集会，区民集会というものは，市民局だけのものではありません。皆さん方自身の仕事です。そして，そのためには，市民に知ってもらうことが大事です。そして市民は，なかなかぜいたくです。すくなくとも『広報よこはま』に載せてある，『神奈川新聞』だとか，何とか新聞に何べんか報道がある。にもかかわらず，いざとなるとそんなものは知らない。こういうのであります。「一人一人の耳もとへいって，一人ずつにがならなければ，君らはＰＲを受けたといえないのか」と，ぼくはときどき居直るのでありますが，しかし現実にはそのようです。

また，市民局で調べてもらういろんな調査によっても，『広報よこはま』は女の人は比較的よく読んでるけれども，男の人はほとんど読んでいない。この中でも，皆さんほんとうに読んでいますか。だいたい男が読んでないのが現実のようであります。ぼくも率直にいって市役所へ行くと，係の人が持ってきてくれますから市長室でしぶしぶ読む。うちではほとんど見ていません。これはぜいたくです。だがしかし，やはりわれわれはそれを乗り越えなきゃならんのですから，市民に対して適正な情

報を公開する各局でそういう努力はたえず必要でありますし，そしてまた区民集会，区民会議のようなところへ出てきて，どんどんそういう情報を公開していただいていいと思います。

ただ，いま検討中のプロジェクトなんていうものは，頭から公開しますと，正直申し上げてたいへんなことになります。例として適切であるかどうか知りませんけれども，たとえば地下鉄3号線をきめるというのについて，早くから，市民に対して「A案とB案，C案があります。どれがいいでしょうか」なんていったら，みんなエゴイズムと結びついて，勝手気ままなことをいい，収拾がつかなくなるでしょう。あとで私は申し上げたいと思うのですが，専門家としての責任と権威というものを，やはりわれわれは必要とします。したがって専門家として交通局の中で十分討議をし，討議の結果原案がきまる。その原案を私たちは市民に出して，しかし隠す必要はないでしょう。A案もB案もあります。これこれこういうわけですというふうに出し，しかも市民にできる限りの説明をしていく。だがしかし，われわれだって神さまではありませんから，もし自分のほうになるほどと思う点があればそれは気持ちより取り入れていくという，たとえすこしおくれても取り入れていくという，こちらの側のすなおさも必要だ。その点がぼくはいちばん重要だと思います。

こうして，すべてのものを頭から公開してしまわれても困ります。したがってどこまで公開するかということは，たえず局，および局間において意思統一がされていなければいけないと，私は思いますが，そういうものに基づいて，できるだけ情報は公開してほしい。情報を出し，啓蒙をする。そして私たちが市民に対して十分話をする。

しかしそこでもちょっと注意していただきたいのは，「4・21スト」とか「賃闘」とかということばづかいの問題です。ぼくの母親なんか生きてるころによくいっていました。「賃闘っておまえ何だい？」とよくいうのであります。一般の市民には「賃闘」とか「4・21スト」なんていうのはわからないのであります。こういうふうに仲間うちだけで通じる符丁を使うということは，もうその人の頭がマンネリ化し，固定化している証拠であります。

なぜ市民に一声でわかるような符丁でない用語を使えないのか，「賃金アップの闘争」といって，一体何秒よけいかかるでしょうか。すぐ略語を使っちゃう，このごろの労働組合運動というものについては，労働組合運動それ自身が老化し，ある意味で硬化しているということを示している一つのクライティーリオン，基準だと，ぼくは思っています。そういう意味で，できるだけぼくは自分の運動の中でも，そういう符丁，合いことばを使わないことを，たえず自分に課してきました。それと同じです。

皆さん方も「都計審」なんていうんですね。われわれの中では都計審でけっこうなんです。しかし「都計審てどこの時計屋さんですか」ってこのあいだ聞かれたんです。「シチズンですか，セイコーですか」といわれたんですが，やはり「都市計画審議会」と，きちんというと同時に，「これは県庁の中にあります」と，ちょっと一言つけ加えていただきたい。都計審が横浜市役所の中にあるのか，県庁の中にあるのか，それすら市民は知らないんですから，知らないことについて市民に過失はないと思います。そういうことを正しく教えてこなかった私たちに過失がある。われわれは専門家なんで

すから，専門家にはつねにそういう責任があるように思います。ですから，「都計審」とわれわれの中でしゃべるときはそれでけっこうです。しかし大衆に接したときには，「県庁の中に開かれます都市計画審議会」こういってほしい。つまらないことのようですが，こういうことが大事でしょう。

同時にまた，それは私たちが専門家のあいだで符丁を使っていく観念の固定化，マンネリ化を自分で防ぐ努力にも通じるはずであります。たえず，どういうふうに市民にわかってもらうかということを考えるならば，自分の観念を正確にしない限りだめでしょう。いいかげんに符丁で話し合っていると，つい，いいかげんの符丁の上にあぐらをかいてしまう。ですからこれについて，自分で自分を戒めていくことが必要です。

こういうふうに，情報の公開という点についても，ひとつ部署の方々に検討をしていただいて，お互いに話しあう，連絡しあう，そして市民にわかることばでしゃべっていただく，こういうことが必要ですし，多少それは啓蒙的でもけっこうだろうと思っています。そして皆さん方にも，市民の声を聞き，市民相互の交流の中から出てくるエネルギーを，市政の中に生かしていくことをぜひお考えをいただきたいと思います。

皆さん方自身も，失礼ですけれどもそこから学べるはずです。たとえば企画調整局のある幹部の話ですが，彼が市民の会議に出かけていろいろ議論をききそれに刺激をうけて，そのあとで身体障害者の施設や何かをずっと回ってみたそうであります。その結果，彼は総合計画をつくる中心人物でいながら，いざ身体障害者のところを回ってみると，全くかわいそうだといって，〝鬼の目に涙〟といってからかったんですが，「かわいそうだ，かわいそうだ」とこういっている。学んでいるわけです。かくのごときすぐれたプランナーですら，現場を見直すということは学ぶことです。

そういうふうに，下水道局の皆さん方でも，市民の中に出ていって，たとえば医療問題についていろいろ議論のあるのを聞いてみれば，わが身に照らして学ぶことになるでしょう。こうして市役所にいる人々は，市政全般についてわかってほしい。こう思うのであります。そういう意味で『庁内報』なんていうものを出して，職員の人々にその局の問題点について議論をしてもらうだけではなしに，全局の問題を知ってほしいと思っているんですが，なかなか知らないようですね。自分の局の問題でも時どき錯覚があるんですから，ましてや他局のことを知らないのは無理ないかもしれない。極端な例をあげると，奥さんのばあい「市役所でもってごみをとっているんですか」かとおっしゃった市の吏員の奥さんがいらっしゃいます。ぼくは現に知っているんです。そういうことがあって，なんで市民を納得させられるだろうか。そういう感じがするわけです。ぜひ皆さん方が市民集会に出てきて，学んでいただきたい，こう私は思うのであります。

そして，学ぶためには，自分の担当している局について真剣に検討し，他局と連絡をしているとすれば，学ぶ態度というものもきっと出てきます。そういう意味で，ぜひひとつお願いしたい。

ところで，こういうものを妨げているのが，現実にはタテ割りによる予算編成というものだと思います。予算編成のしくみがそういう形になっております。これは全国共通の予算の組み方をしていますので，すぐには変えられません。しかし予算はタテ割りで組んであっても，お互いに相互連絡をす

ることによって，タテ割り行政を打破して，共同の作品という形にできるはずだ，こう思います。そういう意味でぜひひとつ局相互間，局と区役所との連絡を徹底的にやっていただくという体制が，区民会議のためだけではなしに，市のために必要ですし，そしてそういうものが区民会議を正しく執行していく上に必要です。

職員の具体的任務

そこで，もっと具体的なお話をさせていただきますと，区民会議にもできれば局長さん，部長さんに出席をしていただきたい。しかし万やむを得ない場合には，すくなくとも担当の庶務部長さんなり庶務課長さんなりというものをきめておいて，その方は局全体について勉強をしてかならず出席をしてほしい，こういうふうに私は思います。

いままでの問題点をあげてみますと，区役所の側からは，局内ではわかりきったことでも，じつは区役所にはわかっていない場合がある。そういう意味で区役所にもぜひ懇切に教えてほしい。そしてまた現実には相談にいっても教えてくれない場合がある。こういっていますし，局から出してくる資料がひどく古い資料で，勉強家の市民に逆に指摘されてしまう。こういうことさえいわれています。それから，作成した資料が市民や部外者にはわかりにくい。区役所の人々にはわかりにくい。こういうことをいっています。それからタテ割り予算主義では，区内における事業計画がわかりにくい。その点についても，もうすこし話し合う方法を考えてほしい，こういうことをいっています。

また，局の側からいわせますと，区民集会がいろいろの事業説明会と重複していく。たとえばあそこへ高速道路をつくる，その説明会を徹底的にやっていく。そこへ部長さんや局長さんがみんな出席していく。ところがそれと並行して，またこっちでも区民会議が行なわれてるという形になりますと，重要だということはわかっていながら出席しにくい。回数が多過ぎる。こういうことをいってまいります。たしかにそのとおりだろうと思います。

したがって，そういう点について局内でいろいろ討議をして，手分けをするとか，いろいろな形でやってほしい。解消してほしい。これを乗り越えてほしい。こういうふうに思っております。

たしかに，われわれが新しいものをつくり出そうとする限り，いままでのマンネリの上で寝ているよりは苦労があります。ずっと忙しいと私は思うんです。ですが，その忙しさをいとっておれば，いつまでたっても旧態依然じゃないだろうか。そういう意味で，私は大きなことをいうように思われますけれども，横浜市役所こそは日本の先頭になって，そういう新しいものをつくり出していく市役所になりたい。こう思っているわけです。できるんです。

現実にいま私が京都に行って自慢したと申しましたけれども，私が東京へ出ていきまして，建設省だとか，運輸省だとか，自治省だとか，大蔵省だとか，方々へ出かけていきます。国会時代からかなり親しい役人もたくさんいます。そういう連中が異口同音にぼくにいうんです。「横浜市役所の水準はすばらしいものです。もう私たちとほんとうに対等で……。」「対等で」というのはなまいきですけれども，ぼくは，「なまいきなことをいうなよ」というんですが，「われわれ自身がむしろこのごろは横浜市役所に教わることが非常に多い」，こういっています。そして，お世辞かもしれませんが「市長さんがかみつく精神だから，きっと皆さん方も伸び伸びやっているんですね」なんていっていますが，いずれにせよ。そういうふうにもう中央官庁ですら，横浜市役所の権威というものをある程度，認め始めた。できるんです。

ですから横浜市内部におけるそういう問題についても，私はかならずできると，こう思っているんです。どうぞ皆さん方に十分そういう点の検討と，それから区民会議に対する積極的なご協力をいただく……ご協力というよりも，皆さん方自身が現実にこれを実行する，実現する，こういう考え方になっていただきたい。こう思っています。たしかにそれはむずかしいことです。むずかしいけれどもわれわれは乗り越えるんだと。乗り越えない限り，いつまでたっても「百年河清を待つがごとし」という結果に終わるだろうと思います。先駆者の仕事はいつでもつらいんです。いつでもつらいけれども，しかしでき上がったときには新しいよさをわれわれは享受できるだろう。こんなものが1年や2年でパッパッとできると思うほど単純ではないつもりです。

ぼくはちょうど市役所に来て11年目です。しかし，この11年間，かなり私は根気よくいろいろなことを進めてきて，いくらかいま，その効果が出かかっている。10年で出かかってきた。あとの10年でそれは完成できるかもしれない。もちろん10年も20年もぼくはここにおられるとは思いませんが，しかしその道をすえていく。皆さん方だってあと10年，15年，20年といえば，だいたい定年になられる方が多いんじゃないかと思いますが，ですから皆さん方も，いちばん労苦の多いところを担当していただいて，この次の若い連中によいものを残してやるという決心になっていただくよりしょうがないんだろうという感じがします。そういう点で一つ一つたいへんむずかしい。こう思います。

たとえば目の前に民生局の人がいますが，このあいだ伸愛学園で全くかわいそうなほど苦労しました。しかし，この苦労はかならず次の人々の代の中に生きていく。こうぼくは思いますし，民生局の人たちがあの苦労の中からつくり出した結論に対しても，ぼくは全くりっぱなものだったという感じがしているわけです。

こういうふうに，みんな一つ一つが苦しい。汗水しぼって，そのときはもういやだ。なんて残酷なことを飛鳥田さんはするんだろうと思いながらも，しかし乗り越えてみれば，かならずいい結果が出ています。高速道路にしたって，たしかに難関にぶつかっちゃっている。しかし私は，高速道路の前でたじろいで，たじろいでただうしろへ下げるだけの考え方はしていません。聞くべきものは大いに聞きつつも。しかしわれわれは前に進まない限りだめなんです。前に進むためにはあらゆる苦難が待っているかもしれない。それを乗り越える。

医療問題だってそうです。大体この11月1日から夜間診療を実現しようなんていうのはいささか無謀な衛生局の専門家からいわせれば無謀なことかもしれない。しかし無謀でもそれを乗り越える努力があって初めて本物になるんです。

そういう意味で，ぜひひとつ皆さん方が，この区民会議についても乗り越え，そしてやがて大事な

横浜市政に大きな変革を加えていく，外にむかって市民の組織として大きな政治的な変革をつくり出し，うちへひるがえって，私たちのタテ割り行政というものを変質させていく効果を持っている。この仕事をきっと乗り越えて下さるだろう。こう思っているわけです。直接担当しているのは市民局ですから，市民局のほうから皆さん方のところにいろいろお願いにあがります。ぜひ皆さん方でご協力をいただきたい。

ここでもまた，ばかばかしい話があるんですが，市民局のある部長が何かいっていっても，なかなか局長さんに相手にしてもらえないんですよ」なんていう話があります。「なぜ」と聞いてみたら，「私は部長でしょう。向こうは局長でしょう」なんていう。「そんなばかな話がこの横浜市役所で通用しているんですか，へえ」といって，ぼくは驚いたわけです。仕事が主です。その仕事に関する限り局長さんであろうと，部長さんであろうと，あるいは課長さんであろうと，係長さんであろうと，私は関係ないと思う。やはりその仕事についてお互いに話し合うということなんですし，その仕事を完成させるために協力するんですから，そういうばか話が，明治時代の幽霊が，もはや横浜市役所の中では影をひそめていいんじゃないだろうか，という感じを持っております。どうぞひとつ皆さん方の市民局との十分な話し合いというものをお願いしたいと思います。

長い話をしてしまいました。以上であります。

1974

これは49年５月２日におこなった各局市民討議関係者（部長・課長・係長）に対する講演の要旨です。